

けられてきた私たちだったから、しかしその言葉にうそはなかった。

ナホトカで高砂丸のタラップを登り、迎えの日本人と会い、タラップが取り外されて船が岸壁を離れたのだ。「バンザイ」思わず居合わせた仲間たちと手を取り合って涙を流し合った。望郷二年余、舞鶴の様子目にしたとき、ソ連の方向へ思わず合掌したのだった。

シベリア抑留記

岐阜県 梶 田 利 男

黒河山神府第九八四部隊戸沢隊に入隊したのは昭和二十年五月二十二日、北海ではまだ朝は霜柱の立つ寒さでした。でも北海の夏はすぐやって来る。初年兵の訓練は我々輜重隊だから馬の世話だけ、他の兵科と違うところでした。一人一頭ずつ受け持って、私の馬は「秋月」といって、あとびきするくせのある馬で苦勞しました。毎日馬の寝わら上げから馬糞の始末等、そ

の上班長や古兵の世話まで忙しく、疲れる毎日でした。七月の初旬に演習ということで師団の大移動で、チチハルに向けて一か月の行軍をしました。これが対ソ戦の準備などは下級兵士の我々にわかるわけはありません。

八月一日チチハルに到着、その夜一服する暇もなく転属命令です。第三七三四五部隊挺身大隊へ行きました。今度は歩兵になり戦車攻撃の訓練中、八月九日対ソ開戦となり、直ちにハルビンに移動しました。

八月十五日、終戦の詔勅をハルビン学院の廊下のラジオで聞きました。よく聞きたれなかったが、日本が連合国に無条件降伏ということであったようです。見習士官は床をたたいて泣きました。我々下級兵はわかぬままに、とにかく命は捨てなくてすむのかなと安心したり、反面これから先どうなるのか不安でした。すぐ原隊の駐屯している富士高等女学校へ戻りました。

次の日ハルビンでの市街戦の配置につきましたが戦鬨はなく、ソ連軍に降服、ハルビン競馬場で武装解除、

小銃等を捨て、丸腰になりました。香坊に寄營、昼食も炊いたまま食はず追い立てられるように阿城へ向けて行軍しました。途中私は本隊から落伍してしまいました。でも後の部隊について行軍しなければ満人に殺されてしまうので、兩上がりのぬかるみを必死の思いで阿城まで歩きました。すでに本隊は列車で出発したあとでした。後続の列車で残留組と牡丹江へ向かって列車は走りましたが、途中一面坡を過ぎたところでも動かなくなり、下車徒歩で行くことになる。横道河子では戦死者や軍馬のしかばねが臭くて、激しかった戦闘の跡を見ながら雨の中、野宿、野宿で海林にたどり着きました。

九月になって千人ずつ編成され、東京ダモイと喜んで乗った列車がシベリヤ行きとはだれ知らず、ハルビン学院出身の通訳はハバロフスクだと言う列車は西に向かっている。東京ダモイは断念しなければならぬ。ここでの給食は雑穀の炊いたものであった。さらに走り続けて大きな海に出た。バイカル湖である。湖畔に停車、用を足したり給食があり、顔も久しぶりで洗っ

た。イルクーツクを越して、タイセツトから支線で何十キロかわからないが入ったところ、カスタマロフというところに下車、收容所へ向かう。以前囚人がいたようで、今日からの宿舍となる。喜んだのは南京虫であった。今晚から新しい血が吸えらる。四隅に望楼が立つて銃を持った歩哨が四六時中監視をしている。下手に逃げようものなら一発であの世行きだ。次の日から作業は後続部隊が来るらしく宿舍づくりだ。穴を掘って丸太で柱を立てて天幕をかぶせて宿舍づくり。二重とはいえこれからのシベリアの冬をこの天幕でどう過ごすのか。

一か月ほどしたら後続部隊が到着、收容所は満員となる。ところが点呼が大変だ。我々を並ばせて一時間以上かからないと人数がつかめない。零下三十度の野外ではたまったものではなかった。

收容人員がそろったところでラポータ（作業）が始まる。伐採は二抱えもある松の太木を切り倒して一メートルぐらいに切る。払った枝は燃火する。二人一組で鋸で切り倒すのだがなれない仕事で、ノルマなどで

きるわけではない。監督はやかましく、ノルマができれば帰さないと言う、でもカンボーイ（監視兵）は、仕事はどうであれ時間がくれば収容所へ連れて帰らねばならず、監督とけんかして作業終わり、収容所へ帰る毎日でした。また夜中でも貨車が入ると荷物のおろし作業に出されました。積んであるのが大きな貨車いっばいの木箱です。百人くらいの人力でセイノ、ヨイショ、セイノ、ヨイショと引つ張り、ガラガラとおろすのです。これはアメリカから来たトラックの部品で、収容所の横にある工場へ運んで組み立てるのです。これも昼といわず夜といわず毎日どんどん貨車が入り、雪の中のおろし作業は大変でした。

自動車の組み立ても終わり、大部隊の移動です。支線を東へ、鉄道建設作業に行くと言いました。私は残され知らない部隊に配属され原隊とお別れです。しばらくして身体検査があり、私は栄養失調の手前の三級になり営内軽作業になり、炊事の芋の皮むきや宿舍の窓ふきなどをしました。やがて正月も過ぎ昭和二十一年五月一日、収容所長はヤポンスキー全員を集めて「メ

ーデーおめでとう」と言いましたが、何がオメダイのかわかりませんでした。

シベリアの夏は昼が長くて暗くなるのはほんのひとときです。まあ冬よりは過ごしいと言えるでしょう。八月になると移動することになりました。列車に乗って着いたところがイルクーツクの郊外、国营農場（ソホーズ）でした。ここでは収穫の手伝いです。馬鈴薯の収穫は機械で掘ったあとの芋を拾う作業でした。キヤベツにニンジン等、野菜はいくらでもあるので、ここでは食べ放題みんな太ってバリバリ作業ができました。現金なものです。元気になったところで今度はアングラ河を渡って対岸の農場へキヤベツの運搬。トラックへの積み込み作業に行きました。ここにはソ連の軍隊も収穫の応援に来ていて、一緒に作業をしました。イルクーツクをあとにして西へ向かったところグリオ収容所へ移りました。ここはシベリヤ鉄道の小さな駅でした。その構内の引込線の上の貨車が宿舍でした。このころ毎日ダモイの列車を見送りながらいつ帰れるのか、我々の番がいつくるのか、全くやりきれま

せんでした。ここでの作業は丸太のおろしです。実に大変です。昼夜を問わず、貨車が駅に入ればおろし作業に刈り出され、八人一組で一貨の木材をおろすのです。最初上の部分は力もたいして要らずゴロゴロとおろすことができるが、だんだん下になると二抱えもある大木、十分な食事もしない我々、全身の力を入れ作業をしないとけがをする。野外の気温は零下三十度より下がっている。気の抜けない命がけの仕事である。重量物であるから下手をしてはねられて死亡した人もあった。実に気の毒なことである。戦争は終わったのになぜ我々がシベリアまで来て命を落とさなければならぬのか、全くやりきれない。

ここでは三交替での作業もあった、シラークプロックづくりだ。ポタ山の灰をセメントでかためたプロックづくりである。収容所から三十分以上土トラックに乗って行ったところに工場があり、昼勤はまだいいが、第三師団は深夜一時から八時まで一週間ずつ交替です。まだ火のあるポタ山から灰の運搬ではやけどをするし、屋内での仕事は機械に追われるし、かなりの重

労働である。ここでもノルマが身を削った。

長い長い抑留生活を終わって夢に見た祖国へ帰れる日が来た。昭和二十四年九月、遠州丸は私のシベリア抑留生活に終止符を打ってくれた。異国の地で散った戦友の霊よ安かれ。

シベリア抑留記

鳥根県 八幡義隆

抑留

収容所に入った、タイセット地区第四カロンである。初め入ったのが幕舎で、ここで初めて八中隊の戦友と一緒にあった。幕舎の中は寒い。中でたき火させているが寒い。そのうち編成がありペーチカのある収容所に移った。また八中隊の兵隊と分かれた。百七、八十人くらいいたようだが、ほとんど航空修理所の兵隊で隣に寝ているのもだれやらわからぬ、話相手もなく八中隊の戦友はどこにいるのか。